

## 【B年】復活節第3主日(2023年4月30日)

## 【旧約聖書日課】出エジプト記 16章4~16節

<sup>4</sup>主はモーセに言われた。

「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。<sup>5</sup>ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている。」

<sup>6</sup>モーセとアロンはすべてのイスラエルの人々に向かって言った。

「夕暮れに、あなたたちは、主があなたたちをエジプトの国から導き出されたことを知り、<sup>7</sup>朝に、主の栄光を見る。あなたたちが主に向かって不平を述べるのを主が聞かれたからだ。我々が何者なので、我々に向かって不平を述べるのか。」

<sup>8</sup>モーセは更に言った。

「主は夕暮れに、あなたたちに肉を与えて食べさせ、朝にパンを与えて満腹にさせられる。主は、あなたたちが主に向かって述べた不平を、聞かれたからだ。一体、我々が何者なのか。あなたたちは我々に向かってではなく、実は、主に向かって不平を述べているのだ。」

<sup>9</sup>モーセがアロンに、「あなたはイスラエルの人々の共同体全体に向かって、主があなたたちの不平を聞かれたから、主の前に集まれと命じなさい」と言うと、<sup>10</sup>アロンはイスラエルの人々の共同体全体にそのことを命じた。彼らが荒野の方を見ると、見よ、主の栄光が雲の中に現れた。<sup>11</sup>主はモーセに仰せになった。

<sup>12</sup>「わたしは、イスラエルの人々の不平を聞いた。彼らに伝えるがよい。『あなたたちは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンを食べて満腹する。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であることを知るようになる。』と。」

<sup>13</sup>夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降りた。<sup>14</sup>この降りた露が蒸発すると、見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。<sup>15</sup>イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。<sup>16</sup>主が命じられたことは次のことである。『あなたたちはそれぞれ必要な分、つまり一人当たり一オメルを集めよ。それぞれ自分の天幕にいる家族の数に応じて取るがよい。』」

## 【使徒書日課】

## コリントの信徒への手紙一 8章1~13節

<sup>1</sup>偶像に供えられた肉について言えば、「我々は皆、知識を持っている」ということは確かです。ただ、知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる。<sup>2</sup>自分は何か知っていると思う人がいたら、その人

は、知らねばならぬことをまだ知らないのです。<sup>3</sup>しかし、神を愛する人がいれば、その人は神に知られているのです。<sup>4</sup>そこで、偶像に供えられた肉を食べることについてですが、世の中に偶像の神などはなく、また、唯一の神以外にいかなる神もないことを、わたしたちは知っています。<sup>5</sup>現に多くの神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれるものがあるとしても、<sup>6</sup>わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。<sup>7</sup>しかし、この知識がだれにでもあるわけではありません。ある人たちは、今までの偶像になじんできた習慣にとらわれて、肉を食べる際に、それが偶像に供えられた肉だということが念頭から去らず、良心が弱いために汚されるのです。<sup>8</sup>わたしたちを神のもとに導くのは、食物ではありません。食べないからといって、何かを失うわけではなく、食べたからといって、何かを得るわけではありません。<sup>9</sup>ただ、あなたがたのこの自由な態度が、弱い人々を罪に誘うことにならないように、気をつけなさい。<sup>10</sup>知識を持っているあなたが偶像の神殿で食事の席に着いているのを、だれかが見ると、その人は弱いのに、その良心が強められて、偶像に供えられたものを食べるようにならないだろうか。<sup>11</sup>そうすると、あなたの知識によって、弱い人が減びてしまいます。その兄弟のためにもキリストが死んでくださったのです。<sup>12</sup>このようにあなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるのは、キリストに対して罪を犯すことなのです。<sup>13</sup>それだから、食物のことがわたしの兄弟をつまずかせるくらいなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章34~40節

<sup>34</sup>そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、<sup>35</sup>イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。<sup>36</sup>しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない。<sup>37</sup>父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。<sup>38</sup>わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。<sup>39</sup>わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。<sup>40</sup>わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 出エジプト記16章4～16節

<sup>4</sup>そこで主はモーセに言われた。「今、あなたのために、パンを天から降らせる。民は出て行って、毎日一日分を集めなさい。これは彼らが私の律法に従って歩むかどうかを試すためである。<sup>5</sup>六日目に持ち帰ったものを整えると、日ごとに集める分の二倍になるだろう。」

<sup>6</sup>そこでモーセとアロンはすべてのイスラエルの人々すべてに言った。「夕方には、あなたがたは主があなたがたをエジプトの地から導き出されたことを知り、<sup>7</sup>朝には、あなたがたは主の栄光を見る。あなたがたの主に対する不平を主がお聞きになったからだ。あなたがたが私たちに向かって不平を言うとは、私たちを一体何者だと思っているのか。」<sup>8</sup>さらにモーセは言った。「主が夕方あなたにあなたがたに食べる肉を与え、朝には満ち足りるほどパンを与えてくださるのは、あなたがたが並べ立てた不平を聞かれたからだ。私たち一体何者だと思っているのか。あなたがたが不平を言ったのは、私たちに向かってではなく、主に向かってなのだ。」<sup>9</sup>モーセはアロンに言った。「イスラエルの全会衆に言いなさい。『主の前に近づきなさい。主はあなたがたの不平を聞き入れられた。』」<sup>10</sup>アロンがイスラエルの全会衆に語っているとき、彼らが荒野の方を向くと、主の栄光が雲の中に現れた。

<sup>11</sup>そこで主はモーセに告げられた。<sup>12</sup>「私はイスラエルの人々の不平を聞いた。彼らに伝えなさい。『夕方には肉を食べ、朝にはパンで満ち足りるであろう。あなたがた私が主、あなたがたの神であることを知るようになる。』」<sup>13</sup>さて夕方になると、うずらがやって来て宿営を覆い、朝になると、宿営の周りに露が降りた。<sup>14</sup>降りた露が上がると、荒野の地表に薄く細かいものが、地の上の霜のようにならな積もっていた。<sup>15</sup>イスラエルの人々はそれを見て、「これは何だろう」と互いに言った。彼らはそれが何か分からなかったのである。そこでモーセは彼らに言った。「これは、主があなたがたに食物として与えられたパンである。<sup>16</sup>主が命じられた言葉はこうである。『それぞれ自分の食べる分を集め、一人当たり一オメルずつ、自分の天幕にいる人数に応じて取りなさい。』」

## コリントの信徒への手紙一8章1～13節

<sup>1</sup>偶像に献げた肉について言えば、私たちは皆、知識を持っている、ということは確かです。しかし、知識は人を高ぶらせるのに対して、愛は人を造り上げます。<sup>2</sup>ある人が、何かを知っていると思っているなら、その人は、知らねばならないよう

に知ってはいないのです。<sup>3</sup>しかし、神を愛する人がいるなら、その人は神に知られています。<sup>4</sup>そこで、偶像に献げた肉を食べることについてですが、この世に偶像の神などはなく、唯一の神以外にいかなる神もないことを、私たちは知っています。<sup>5</sup>現に多くの神々や多くの主なるものがあるように、神々と呼ばれるものが天や地にあるとしても、

<sup>6</sup>私たちに、唯一の父なる神がおられ

万物はこの神から出

私たちもこの神へと向かっています。

また、唯一の主、イエス・キリストがおられ

万物はこの主によって存在し

私たちもこの主によって存在しています。

<sup>7</sup>しかし、この知識がだれにでもあるわけではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんできたせいで、偶像に献げられた肉として食べ、良心が弱いために汚されるのです。<sup>8</sup>食物が、私たちが神のもとに導くものではありません。食べなくても不利にはならず、食べても有利にはなりません。<sup>9</sup>ただ、あなたがたのこの強さが、弱い人々のつまずきとならないように、気をつけなさい。<sup>10</sup>知識のあるあなたが偶像の神殿で食事をしているのを、誰かが見たら、その人は弱いのに、その良心が強められて、偶像に献げた肉を食べるようなことにならないでしょうか。<sup>11</sup>そうすると、その弱い人は、あなたの知識によって滅びることになります。しかし、このきょうだいのためにも、キリストは死んでくださったのです。<sup>12</sup>このように、きょうだいに対して罪を犯し、その弱い良心を傷つけるのは、キリストに対して罪を犯すことなのです。<sup>13</sup>それだから、食物が私のきょうだいをつまずかせるなら、きょうだいをつまずかせないために、私は今後決して肉を口にしません。

## ヨハネによる福音書6章34～40節

<sup>34</sup>そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつも私たちにください」と言うと、<sup>35</sup>イエスは言われた。「私が命のパンである。私のもとに来る者は決して飢えることがなく、私を信じる者は決して渴くことがない。<sup>36</sup>しかし、前にも言ったように、あなたがたは私を見ているのに、信じない。<sup>37</sup>父が私にお与えになる人は皆、私のもとに来る。私のもとに来る人を、私は決して追い出さない。<sup>38</sup>私が天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、私をお遣わしになった方の御心を行うためである。<sup>39</sup>私をお遣わしになった方の御心とは、私に与えてくださった人を、私が一人も失うことなく、終わりの日に復活させることである。<sup>40</sup>私の父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、私とその人を終わりの日に復活させることだからである。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・4月30日「復活節第4主日」の日課主題は「命のパン」。「復活節」には、「復活の主」を通してかつてお語りいただいた主の教えを聞きなおすという視点から、その年の福音書にかかわらず、「ヨハネ福音書」から福音書日課が選ばれる主日が設定されている。

・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、エジプトから導き出された民がシナイ山に至るまでの荒れ野の旅の中で日々の糧として「マナ」を与えられた逸話物語の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、使徒が偶像に献げられた肉の是非について論考を加えて勧めを述べる箇所。福音書日課は、「ヨハネ福音書」から、「パンの出来事」を踏まえて主イエスが「命のパン」の教えを語られた箇所から。

**旧約日課(出エジプト 16章より)**

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法」の第二巻で、「申命記」まで続く「モーセ物語」の最初の書。本書は、「モーセ誕生譚」をプロローグとし、順に「モーセ召命譚」、「十の災いと過越の逸話」、「エジプト脱出物語」、「荒れ野の旅とシナイ契約の物語」、「幕屋建設と金の牡牛事件」によって構成される。本書は、正典「律法」の中に位置づけられることによって、「シナイ契約」によって基礎づけられる「神の民＝イスラエル」のアイデンティティが提示されているとみることができる。

・日課個所は、「荒れ野の旅とシナイ契約の物語」の中に置かれた逸話伝承物語で、エジプトを出てきた人々が「シナイ契約」によって「神の民＝イスラエル」として位置づけられるための前提を提示しているとみることができる。すなわち、「シナイ契約」に迎えられるのは、「過越」によって「初子の災い」を一方的に逃れさせてもらった人々であり、エジプトから不思議な御手の御業によって連れ出され、「水」や「パン」など日々の糧を恵みによって天から与えられる人々である。ここでは、人々が主を信じて従順であったかとか、不平不満を言わずに正しいふるまいをしたか、というようなことは問われず、ただ、一方的に恵みとして与えられた出来事の実事の中に身を置き続けたかどうかだけが問われている。「律法」を「聞いて、行う」ことは、「シナイ契約」の後に求められるものである。

・日課個所は、「天からのパン＝マナの出来事」として知られる。「マナ」の呼び名は、日課個所に続く31節で初めて現れ、それまではもっぱら「パン」として描かれる。「天からのパン」が与えられた意味について、「申命記」は、「天からのパン」が命の糧として与えられたことを通して、もう一つの「命の糧」である「神の言葉」によって生きることが人々によって理解されるためであるとしている(申命記8章)。もちろん、「パン＝糧」を天来の恵みと知ることこそなされる公平な「分かち合い」を実現する社会的意義が本義であろう。

**使徒書日課(Ⅰコリント8章より)**

・「コリントの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡集」の第二に置かれた書簡文書。使徒パウロが、自らも創設に携わったコリントの教会共同体に宛てて記した一連の書簡の一つ。パウロは、本書簡を、自らの姿勢も一つの要因となってコリントの教会共同体で起こっていたと思われる分派対立の事態を危惧し、共同体の一致を説くために記した。彼は、自身がコリントの教会共同体に対して第一に責任を負うべき指導者であると自認していた。そこで、本書簡で彼は、自分に近い者たちから寄せられる共同体で起こっていた諸事案について、直接、具体的な助言を与えるを試みている。日課個所では、「偶像に供えられた肉」を食べることの是非が問題とされていることを取り上げて、それに対する自分の考えを展開している。

・「偶像に供えられた肉」とは、さまざまな神々を祀る神殿で犠牲として奉獻された後に「お下がり」として市場に提供されていた食肉のこと。そもそも、ユダヤ人であれば、「食物規定」に則った屠殺処理がされた肉を購入し食べるのが当然であった。ディアスポラ系ユダヤ人も同様で、地中海世界で自由に居住できる時代になってもなおユダヤ人が一定の居住地に集団を形成して生活したのは、「食物規定」をはじめとする「生活習慣」を社会的に維持するためであった。この場合、彼らが食事に供する肉は、宗教的な儀式を経たものもあれば、そうでないものもあった。一方、ギリシア・ローマ化した地中海世界では、多くの神々の神殿が各地に建てられ、日々祭儀が行われていたが、そこで犠牲奉獻に供された動物の肉は、地域市場で扱われる食肉の重要な供給源であった。ユダヤ人居住地ではない地域の市場で入手しうる肉は、ユダヤ教ではない他の神々のために奉獻されたものである可能性が高かった。ユダヤ人の習慣を守り続ける者たちは、そのような肉を避けたが、そのような習慣を捨てたユダヤ人や異邦人は、これを購入し、食べていた。問題は、①その肉が食物規定に則って処理されたものか、②その肉を食べることが異教の神の祭儀に与ることにならないか、という二点にあった。パウロの結論は、「気にせず何でも食べてよい」というものであるが、そのように理解しない者もいた。パウロの論拠は、「異教の神々など、そもそも存在しないから、たとえ祭儀に用いられたものであっても、祭儀的に汚れているようなことはない」という、徹底した排他的唯一神観に基づくものである。しかし、多神教的拝一神観をもって教会共同体に加わっている者もいたため、そのような者は、自分が異教の神(偶像)に接することは背信行為に当たると考えた。パウロは、そのような考えの者も共同体にあることを踏まえて、自分としては、敢えて「どんな肉でも食べる」自由を放棄し、こだわりのある者たちの歩調に合わせるのがよいという判断を、助言として与えている。「使徒言行録」15章のいわゆる「使徒教令」と結論は同じと考えてよい。

**福音書日課(ヨハネ 6 章より)**

・日課箇所は、「パンの出来事」を踏まえて展開されている主イエスの「パンの教え」の一部。「パンの出来事」は、四福音書が共通して伝える逸話伝承で、初代教会の根幹に関わる基礎的伝承物語として扱われていたと考えられる。これをどのように教会共同体の基礎に位置づけるかは「福音書」によって異なる。「マタイ」と「マルコ」は、「パンの出来事」を「五千人の食事」と「四千人の食事」と繰り返すことによって、「ユダヤ人と異邦人を包含する新しい共同体の形成」のしるしとして位置づけている。「ルカ」は、「神の国」実現に向けたしるしとして位置づけている。他方、「ヨハネ」は、主イエスその人が「天からの命のパン」であることとしるしとして、「パンの出来事」を位置づけている。

・日課箇所にある「彼ら」の発言は、前段を踏まえたものである。前段で主イエスは、彼ら「群衆」と「パン」を巡る対話をしている。主イエスの指摘によれば、彼らは、「パンの出来事」を経験した結果、主イエスからさらなるパンを得ることを求めている。しかし、それが二つの点で誤りであることを、主イエスは、「モーセ」の「マナの故事」を引くことで説いている。すなわち、①「パン」はモーセや主イエスが人々に与えるものではなく神が与えるものである。②パンは本質的に神が天から与えるもので、天的な性質のものであり、それゆえに主イエスその人が天からの「命のパン」である。

・ここで「パンの出来事」が主イエスの天来性を示すしるしとして位置づけられるのは、逆説的に「パン」が物質性・地上性を有するものであることに拠って考えられているとみられる。「ヨハネの教会共同体」では、主イエスの天的性質を強調する傾向があったと考えられるが、それによって主イエスの地上性、人間性が曖昧にされ、グノーシス思想などの影響から仮現論的なキリスト論が主張されることもあったと考えられる。「パン」の物質性は、そのような主張に抗い、「イエスを見て、信じる」(36 節、40 節)という信仰理解を補強する。

**来週の誕生日 (4 月 30 日～5 月 6 日)**

**主日礼拝の讚美歌から**

- ・21-6 番「つくりぬしを賛美します」(= I 79「ほめたたえよ、つくりぬしを」)は、もともと 17 世紀のオランダ独立戦争の最中に愛唱された愛国歌であったものが米国の収穫感謝祭の歌として英訳され(「We gather together」)歌われてきた讚美歌だったが、歌詞が愛国的すぎるとの批判から、長老教会の信徒 J・コリーが新しい歌詞を創作し生まれた。
- ・21-419 番「さあ、共に生きよう」は、ドイツ全国信徒大会 1983 年大会のために編纂された讚美歌集『いのちに立ち返ろう』から採用された讚美歌。
- ・21-467 番「われらを導く」(II 22「みちからあふるる」歌詞)は、18 世紀英国のメソジスト牧師ウィリアムズ作のウェールズ語讚美歌が原作で、英語版ほか各国語訳で歌われてきた。曲は 19 世紀ウェールズの教会音楽家ヒューズの作。

**21-6「つくりぬしを賛美します」****Wilt heden nu treden voor God den Heere**

1. Wilt heden nu treden voor God, den Heere, / Hem boven al loven van harte zeer, / En maken groot zijns lieven namens eere, / Die daar nu onzen vijand slaat terneer.
2. Ter eeren ons Heeren wilt al uw dagen / Dit wonder bijzonder gedenken toch. / Maakt u, o mensch, voor God steeds wel te dragen, / Doet ieder recht en wacht u voor bedrog!
3. Bidt, wakent en maket, dat g'in bekoring / En 't kwade met schade toch niet en valt. / Uw vroomheid brengt den vijand tot verstering, / Al waar' zijn rijk nog eens zoo sterk bewald!

**English version by J.C. Cory**

1. We praise Thee, O God, our Redeemer, Creator! / In grateful devotion our tribute we bring; / We lay it before Thee, we kneel and adore Thee; / We bless Thy holy name; glad praises we sing.
2. We worship Thee, God of our fathers; we bless Thee; / Through life's storm and tempest our Guide hast Thou been; / When perils o'ertake us, escape Thou wilt make us, / And with Thy help, O Lord, our battles we win.
3. With voices united our praises we offer; / To Thee, great Jehovah, glad anthems we raise. / Thy strong arm will guide us, our God is beside us, / To Thee, our great Redeemer, forever be praise.

**21-419「さあ、共に生きよう」****Damit aus Fremden Freunde werden**

1. Damit aus Fremden Freunde werden, / kommst du als Mensch in unsre Zeit: / Du gehst den Weg durch Leid und Armut, / damit die Botschaft uns erreicht.
2. Damit aus Fremden Freunde werden, / gehst du als Bruder durch das Land, / beegnest uns in allen Rassen / und machst die Menschlichkeit bekannt.
3. Damit aus Fremden Freunde werden, / lebst du die Liebe bis zum Tod. / Du zeigst den neuen Weg des Friedens, / das sei uns Auftrag und Gebot.
4. Damit aus Fremden Freunde werden, / schenkst du uns Lebensglück und Brot: / Du willst damit den Menschen helfen, / retten aus aller Hungersnot.
5. Damit aus Fremden Freunde werden, / vertraust du uns die Schöpfung an; / Du formst den Menschen dir zum Bilde, / mit dir sie bewahren kann.
6. Damit aus Fremden Freunde werden, / gibst du uns deinen Heiligen Geist, / der, trotz der vielen Völker Grenzen, / den Weg zur Einigkeit uns weist.

**21-467「われらを導く」****Guide Me, O Thou Great Redeemer**

1. Guide me ever, great Redeemer, / Pilgrim through this barren land. / I am weak, but you are mighty; / Hold me with your pow'ful hand. / Bread of heaven, bread of heaven, / Feed me now and evermore: / Feed me now and evermore.
2. Open now the crystal fountain / Where the healing waters flow; / Let the fire and cloudy pillar / Lead me all my journey through. / Strong deliv'rer, strong deliv'rer, / Shield me with your mighty arm; / Shield me with your mighty arm.
3. When I tread the verge of Jordan, / Bid my anxious fears subside; / Death of death and hell's destruction, / Land me safe on Canaan's side. / Songs and praises, songs and praises / I will raise forevermore; / I will raise forevermore.